なぜこんなにも“乳腺・甲状腺”が好きなんだろう。

宮良クリニック
理事長 宮良 球一郎

クリニックをオープンして13年。生誕に戻る「還暦」を迎える。本当は50歳で医者をやめ、別の道に進む計画をたてていたが、甲状腺に関わって30年、乳癌の世界に本格的に取り組んで20年。今や趣味以上にのめり込んでしまい、辞めるに辞められなくなってしまった。

＝そもそもどうして医者を目指したのか＝

高校2年までは、将来の夢はなんとなく、実家の跡継ぎか親父のような国家公務員のどちらかになるのだろうと考えていた。ただ中学二年の時に事故で痛めた腰の治療のため、八重山のありとあらゆる民間療法を受け、島に整形外科がなかったので夏休みを利用して本島で牽引療法も受けた。ただ腰痛はいっこうに治る気配もなく、発作的に激痛に襲われ、将来を悲観するときもあった。

しかし高校3年の春に「自分の腰は自分で治そう。そのためには医者になるしかない」と突然決意。無謀を承知で進路を文系から理系に変更した。腰痛が治っていれば、医学の道には決して進まなかっただろう。

＝整形外科？＝

大学6年間は一度も腰痛発作に見舞われること無く過ごしたせいか、いつの間にか整形外科ではなく病理に魅力を感じていた。しかし家庭の事情で沖縄に帰ることになり、基礎医学から一転病理も臨床もできると言われ琉大第一外科に入局した。

＝波瀾万丈？の10年＝

外科は楽しかったが、当時の医局長に「君は大将にあまり良く思われていないので一緒に内分泌外科しない？」と誘われ、大学院では「肝切除」の研究をしながら、臨床は内分泌診療中心に。出向を命じられたもとぶ野毛病院の上田院長の計らいで北部市町村の健診に甲状腺検診を組み入れ、北部医師会病院で外間副院長をはじめ外科の協力で甲状腺外来を立ち上げた。そこでは患者から「首切り先生」と呼ばれるほど、たくさんの甲状腺の手術を執刀することができた。その後も外科の本筋から離れた病院ばかりの出向を命じられたが、おかげで甲状腺疾患やエコーを存分に学ぶ事が出来た。

＝乳腺への道＝

それは突然やってきた。当時癌研乳腺外科部長 霞富士雄先生の沖縄での衝撃的な講演。本物の「乳腺」を学ぶしか無いと、大将の決して沖縄では働かせないぞという恫喝も、妻の強力な後押しもあり、大学を辞し見切り発車の形で癌研乳腺外科の門を叩いた。今なら全くありえないことだが。

＝至極の2年半＝

一度も沖縄に帰ること無く乳腺学にどっぷりつかった癌研での研修は、一流の先生の「熱い心」にも触れることができた。今も続く全国の先生方との交流はこのときの財産である。

ただ結果として幼子3人の成長を見守れなかったことが今でもとても悔やまれる。

＝帰郷＆開業＝

那覇西CLの玉城先生のおかげで無事沖縄に戻ることができ、沖縄の乳腺診療のスキルアップと市民啓発活動等が楽しく一生勤務医でと思っていた。が、これも突然やってきた。理由はここでは書けない。好きな乳腺・甲状腺診療を続けていく為、2005年礼節を知る仲間と「和」を重視した女性のための乳腺・甲状腺クリニックをオープンした。

＝Pt.first＝

今は月2回、浜松オンコロジーセンター、県立青森／青森市民病院、埼玉医大、東京大学、

杏雲堂病院、大阪医大、相原病院、高知大学、相良病院 etc. の乳腺専門病院と Web カンファレンスを続け、沖縄の患者に貢献するため「さがらウィメンズヘルスケアグループ」で臨床研究を始めている。

腰痛が治らなかったおかげで、好きでたまらない道を見つけることができた。今後は腰痛発作防止に取り組まなければ。「先生お願いだから倒れないでね」という患者の声に応える為にも。